



新島襄の夢と九州

—九州の篤志家に送られた2通の書簡—

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 新島襄書簡と野田卯太郎・永江純一

九州歴史資料館の常設展「歴史の宝箱」には、日本の近代史を彩った著名人の書簡も展示されています。今回はその中から、同志社大学創立者・新島襄が送った2通の書簡を紹介します。

新島襄は、天保14年(1843)、今の群馬県にあった上野国安中藩の藩士の子として江戸に生まれました。幕末期にキリスト教に惹かれてアメリカに渡り、現地で牧師・日本向けの宣教師に任じられます。そして日本にキリスト教に基づく学校を作るという夢を抱いて帰国し、明治8年(1875)京都に同志社英学校を設立しました。これがのちの同志社大学の始まりです。さらに新島は、この同志社の学校を発展させ、最終的には多くの学部を擁する総合大学にすることを夢見ていました。もちろん、そのためには多額の資金が必要でした。新島はその資金を集めるため、多くの人々に書簡で資金協力を依頼していたのです。

この新島の書簡を受け取った人物の中に、福岡県の二人の政治家、野田卯太郎と永江純一がいました。

野田と永江は、嘉永6年(1853)に現在のみやま市に生まれます。共に自由民権運動に身を投じ、明治19年に福岡県会議員、明治31年に衆議院議員に同期当選しました。また共同で企業も興しています。政界では戦前の大政党、立憲政友会に所属して二人とも幹事長を務め、さらに野田は逓信大臣、商工大臣として入閣も果たしました。

今回紹介する2通の書簡は、この野田・永江の連名宛に、新島が明治22年、資金集めの一環として出したものです。1月11日付の書簡では、野田・永江に大学設立への賛助を求め、さらに二人の地元の有志資金の取りまとめも依頼しました。この依頼に二人は応じ、それに対して5月10日付の書簡で、新島は二人に謝意を述べています。この二つの書簡は、新島が大学設立の資金をどのように集めようとしていたのか示すとともに、大学設立の夢が遠い九州の人々にも届いていたことをも示す、貴重な資料といえます。

2 明治22年1月11日付書簡

一書拝啓仕候、陳者小生二ハ未夕兩君トハ辱知之榮を蒙らざるも、過日在熊本神山充家ト申候小生之知人、又敝校同志社之一生徒なる柳川産広津友吉ト申者より照会有之、兩君二ハ小生輩之企居候私立大学之學ニ付大ニ御賛成被下候趣を以而、小生より一書奉呈是非とも特別ニ御依頼可申上旨被勸候間、喜欣措く能ハす茲ニ秃筆を把り寸書を呈シ交誼を結び、右大学之學ニ付此上充分之御賛助を仰度、又可相成は御地方有志金取纏之件も兩君二而御負担被成下、御便宜次第福岡日々新聞社ニ御送附被下候ナリ、又ハ敝社ハ御直送被下候ナリ、宜しく御依頼奉申上度候、貴県より被參候生徒之内、已ニ普通科ニハ、八九名之卒業生も有之、又既ニ、三十三四名之入学生有之候次第なれば、将来大学設立之日ニ及候ハ、必らず多分之入(來)校生も可被來ト希望仕居候間、幾重ニも大学之學ハ御賛助被下候様切望悃願之至ニ不堪候、右御依頼迄得貴意度、忝々敬具

一月十一日 新島襄(印)

野田卯太郎殿

永江純一殿

追伸、兩君ハハ兼而右大学設立旨趣書等御送呈仕置候得共、今回二十部并同志社設立始末書二十部御郵送可仕候間、御知人中ニ御分配被下度、又充分之御奨励被成下度奉切望候

これは、当時野田・永江とは「辱知之榮」つまり面識の無かった新島が、熊本や柳川出身の知人から野田・永江への資金協力依頼を勧められ、その結果送った書簡であると記されています。そして書簡の中で、二人に大学への賛助と、周辺の人々からの資金集めを、何度も繰り返し依頼しています。ここから新島の、面識の無かった人にも伝を頼って積極的に資金集めをしていた情熱が伝わってきます。

また文中の新島の知人や福岡県出身生徒の存在から、同志社と九州の人々とのつながりも見えてきます。

3 明治22年5月10日付書簡

肅啓、逐々温和之候ニ相趣候際各位益御清適奉欣
賀候、陳者過般書を呈し敝社大学資本募集之件
ニ付、第一二御賛成を相願ひ且御地方有志御奨励
之事迄御依頼申上候処、直ニ御承諾被下置、今回
氏友社之徳富猪一郎氏帰京之際、御地方之集金ハ
同氏ニ御渡し被下候旨同氏より申聞かせ、且各位
ニハ是非ニ大学之為御尽心被下候由逐一承り、真
ニ御好意之程奉万謝候、但し大学之拳たる只ニ資
金募集之事ニ止まらず、資金相整候上ハ地方より
広く人物之募集を致し有為之図器を養成仕度候間、
未長く吾人之拳を御賛助被下、御互ニ我力邦家
百年之大計を立度候間、何卒此一点ハ今(本)日
より御含置被下度奉切望候

右御礼旁御左右伺度、如此候也、忝々敬具

五月十日

新島襄

野田卯太郎殿

永江純一殿

尚々、御連名ニ而一書相呈し候段御免可被下候
尚此上も御地方之有志家ハ御奨励被下候而逐々他
県ニも波及し、九州一円此拳を賛成致し呉候様仕
度候
九州ニ而も敝校ハ書生を多く出せし分ハ、独福岡
と熊本のみ、大分ハ僅ニ、薩州、日向も尚未夕僅
少なり

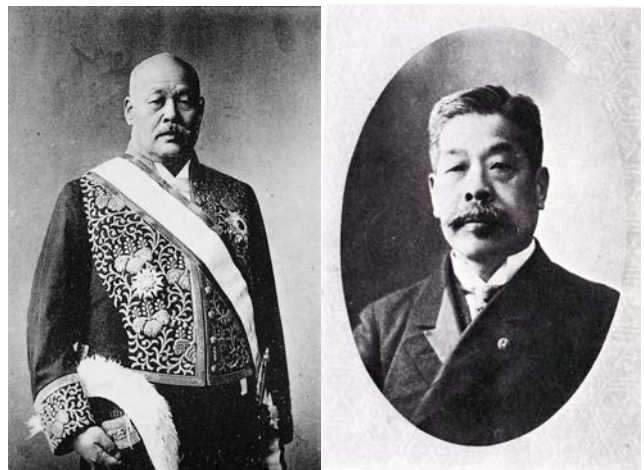
二通目のこの書簡は、一通目の書簡の依頼に野田・永江が協力したことへのお礼が述べられています。一通目の書簡が送られた後、野田と永江は、同志社出身のジャーナリスト、徳富猪一郎(蘇峰)を通して、同志社に資金を送りました。金額は同志社の記録によると、二人で百円となっています。当時、米一石(約60kg)がおおよそ五円の時代でした。

書簡では、この協力に対する謝礼を述べると共に、大学設立後は、地方から広く人材を集めていきたいことが述べられています。そのために野田・永江に、以後も未長く協力してほしいと依頼しています。また書簡の最後には、福岡県から多くの生徒が同志社に入学していたことが記されています。

4 大学構想のその後と野田大臣

こうして、野田や永江も協力していた同志社大学の構想ですが、計画はすぐには実現しませんでした。実は、この書簡が出された翌年の明治23年(1890)、新島は資金集めに東奔西走する中に関東で倒れ、志半ばで亡くなってしまいます。その後、新島の遺志を継いだ関係者たちが大学作りを進め、明治45年ついに同志社大学の設立に至りました。しかし、当時は法的な大学は国家が設置した帝国大学しか認められていなかったため、この時の同志社大学は「大学」とは名乗りつつも、法的には「専門学校」という位置づけでした。その後、大正7年(1918)に私立大学も法的に公認する「大学令」が公布されたことに伴い、大正9年、同志社大学は法的にも大学となり、新島の構想がようやく実現しました。

ちなみに、この大学令を制定したのは、野田が逓信大臣として入閣していた原敬内閣でした。つまり野田は、同志社が名実共に大学になる法令の閣議書に署名していたこととなります。明治22年、新島が人生最後に注いだ情熱に力を貸していた野田は、その29年後、大臣として新島の夢をかなえる署名をしていたのです。(学芸調査室 渡部邦昭)



野田卯太郎(『野田大塊伝より』) 永江純一(『三池郡誌』より)



明治22年1月11日付書簡



編集 発行: 平成25年5月14日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>